

古代の常陸大宮を知る



調査状況空中写真（消防署のドローンで撮影）

令和2年7月から8月上旬にかけて、常陸大宮市史編さん事業の一環として、糠塚古墳の墳形確認調査を実施しました。その調査の概要をお知らせいたします。

●糠塚古墳とは？

糠塚古墳は、常陸大宮市小祝地区に所在する古墳です。久慈川右岸の段丘上・大賀小学校の南に立地するこの古墳は、古墳時代中期（5世紀）に作られた前方後円墳とされており、同時代に作られた前方後円墳としては、久慈川流域で最も北に位置しています。これは、歴史的にも非常に重要であるため（理由は後ほど）、旧大宮町時代から史跡として指定されています。現在は後円部の墳丘と、前方部の一部と思われる土盛りしか残っていませんが、過去に実施した測量調査の結果を見ると、後円部径約48m、前方部長約40m（推定）、全長約88mにもなる大型の前方後円墳と復元されています。



糠塚古墳（令和2年3月撮影。西から）

●調査の目的

しかし、復元の根拠が明確でなく、「土盛り」も古墳の一部であるという確証がないため、近年になると、糠塚古墳は円墳ではないかという論説が唱えられるようになってきました。先ほど、前方後円墳の存在が歴史的に重要だと述べたのは、前方後円墳がヤマト王権から許可を得て作られるものであるため、必然的にこの地域の権力構造の問題ともかわり、また、ヤマト王権が支配するエリアを示すことにもなるからです。そのため、前方後円墳か円墳かという問題は、常陸大宮の古代史を解明するうえで大きな注目点となることから、その真相を確かめるべく、確認調査を実施しました。

●調査方法

今回、前方後円墳／円墳を確認するために実施した手法は、前方部と復元されている場所の中央にトレンチ（長さ50m、幅1.5m）を1本入れ、周溝（古墳の周囲に掘ってある溝）の位置を確認するというものでした。①周溝が後円部に近く、後円部の形に平行であれば円墳、②復元した前方部の前端付近から出現したら想定されていたとおりの前方後円墳と考えられるわけです。周溝については底部まで掘り込み、周溝の深さや遺物の出土状況などを確認しました。

●調査結果

調査を進めた結果、土中から出現した周溝は当初の予想に反し、後円部付近からトレンチの中央部にかけて、墳丘と平行ではない状態で確認されました。つまり、円墳ではなく、以前から想定されていたような前方後円墳でもないことが明らかになってきたのです。そこで、トレンチの南側を出土した周溝に沿って拡張したところ、南側に連続する周溝と前方部のコーナーが確認されました。このことから、糠塚古墳は当初の復元図とは規模や前方部の向きが異なるものの、前方後円墳で間違いはないという結論に至りました。また周溝の中からは、弥生時代や古墳時代の土器なども出土しています。これらの検討結果を含め、今回の調査成果については、『常陸大宮市史研究』にて後日報告する予定です。



周溝と前方部のコーナー（拡張部から）

今回の調査では、土地の所有者・管理者の方をはじめ、たくさんの方々にご協力いただきました。常陸大宮市史編さん事業では、こうした成果を記録にまとめ、ふるさとの貴重な資料として伝えていくため、今後とも調査をつづけてまいります。皆様のご理解とご協力をお願いします。



設定したトレンチ（後円部側から）



出土した周溝（中央～奥の低い場所）



糠塚古墳復元図（黒線が過去の復元図、赤線が調査をもとに作成した暫定的な復元図）

■問い合わせ■

文化スポーツ課 文化・スポーツグループ ☎52・1111（内線344）